

開会 令和2年8月24日

閉会 令和2年8月24日

足利市総合教育会議

足利市教育委員会

令和2年度第1回 足利市総合教育会議会議録

1 開催日時 令和2年8月24日（月）
開会 午後4時00分 閉会 午後5時15分

2 開催の場所 足利市役所4階 特別会議室

3 出席者

市長	和泉 聡
教育長	若井 祐平
教育委員	笠原 健一
教育委員	市橋 雅子
教育委員	菊地 義典
教育委員	照本 夏子

4 会議出席した事務局職員

総務部長
行政管理課長
教育次長
教育総務課長
学校教育課長
教育総務課庶務担当総括主幹
教育総務課庶務担当主幹
学校教育課指導担当主幹
教育研究所次長

5 傍聴 傍聴者 1名

6 会議日程

日程第1 議題（1）中学校区教育の推進について
議題（2）GIGA スクール構想を核とした教育のICT化について

7 議事の経過

○ 開会

○ 和泉市長あいさつ

皆さんこんにちは。暑い日が続いておりますが、日頃より教育委員の皆さまにおかれましては、各般にわたる教育、スポーツ行政にご尽力いただきましてありがとうございます。

ご承知のように、今年に入って新型コロナウイルスの関係で、学校現場も大変大きな影響を受けましたが、今進んでいるところでございます。

臨時休業や夏休みの期間の短縮という、前例のないような状況があるわけですが、お陰様で足利市内の学校どこも、大きなトラブルや事故なく、子供たちが元気に2学期の授業に入っていると良いのだと思っております。

臨時休業明けに、私も中学校、小学校を訪問させていただきましたけれども、子供たち、先生たちが工夫しながら元気に活動している姿を見て、大変心強く思った次第であります。

足利市はコロナ関係では、明日の笑顔プロジェクトとしまして、3次に渡って様々な施策を行ってきている訳ですが、特に今日議題になるGIGAスクール構想につきましても、国からの予算措置もあり、充実、加速するという状況になっております。

今日の議題は、そのほか中学校区教育の推進ということでもありまして、いかに中学校区を単位に、特に小中学校が子供たちのために充実した連携が取れるかということがもう一つのテーマということでもあります。

教育現場を巡る話題というのは、コロナもあり、大変多岐にわたって尽きないところなんです、この二つを中心に今日の会議を展開していきたいと思っておりますので、どうぞよろしく申し上げます。本日はよろしく申し上げます。

○ 若井教育長あいさつ

それでは、一言挨拶を申し上げます。今、市長からもお話がありました。短い夏休みが終わりまして、2学期が始まってちょうど1週間過ぎたところでございます。お陰様で、各学校の先生方、それからお家の皆さん、地域の皆さんに見守られながら、子供たちが厳しい暑さの中で元気に通学しております。本当に感謝しておる所でございます。

学校は、特に2学期という期間は大きな行事が予定されています。運動会を始め、合唱コンクールであるとか修学旅行といった、例年通りとはいかない中でも先生方それぞれ知恵を出し合ってください、子供たちにとって意義のある充実した学期になることを願っているところです。

さて、今日の総合教育会議、中学校区教育と GIGA スクール構想についてですが、なぜ中学校区教育なのか、あるいは、なぜ GIGA スクールなのかといったことについて、ちょっとその一端をお話させていただいて挨拶させていただきます。

お手元に左上を止めた、①という資料がございます。それをちょっとごらんいただきたい。まず中学校区教育ですけれども、学校教育法にこういうことが謳われております。真ん中の段落を見ていただきたいと思うのですが、普通教育の目標とあります。いわゆる小学校から中学校の義務教育の段階で何を学ぶか、その中身、目標が1番から10番まで示されています。中を読んでもいきますと、それぞれの教科領域等に充てられています。

1番、2番あたりはどちらかという道德とか特別活動を通して学ぶ内容となっています、3番目は社会科でしょうか。4番目は家庭科、技術家庭、5番目は国語、6番目が数学、7番目が理科、8番目が保健体育、9番目は音楽、美術関係、そして10番目が進路指導と言いますかキャリア教育。こういった内容を9年間の義務教育を通して身に付けていくんですという風に学校教育法で示されています。

ところが次のページを見ていただきたいのですが、②です。やっぱり真ん中の第30条です。これは小学校の目標がここに書かれているのです。小学校における教育は、前条に規定する目的を実現するために必要な程度において第21条各号に掲げる目標を達成する、先ほど一番から十番まで、これが第21条、小学校です。これがそのように書いてある。

次の③の表紙を見ていただきます。今度は中学校の目標が第46条に。これにも第21条各号に掲げる目標を達成するように行われるものとする。いわゆる小中、特別中身が示されていないのです。全部第21条を見なさい。従って小学校、中学校それぞれ共通した目標になっている。これが中学校区ひとまとまりにして、一貫した教育を行っていくという大本の根っこはここにあるわけでございます。

次に GIGA スクール構想ですけれども、これは学習指導要領に示されています。④を見てください。これは中学校の学習指導要領です。「第4 生徒の発達の支援」の1の(4)のアンダーラインを引いたところです。指導方法や指導体制の工夫改善により、個に応じた指導の充実を図ること。その際、第3の1の(3)に示す情報手段や教材・教具の活用、第3の1の(3)というのが⑤、次の最後のところです。第3の1の(3)アンダーラインを引いたところです。情報活用能力の育成を図るため、各学校において、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整え云々とあります。いわゆる個に応じた指導するためにコンピュータ等を十分活用するようにと。この学習指導要領、これに基づいた GIGA スク

ール構想を文部科学省は打ち出しているのをごさいます。

本日の二つのテーマですけれども、いずれも子供たちの学力向上に関係するテーマでございます。いろいろと議論いただきたいと思います。よろしくお願ひします。

○ 日程第1 議題(1)

学校教育課指導担当主幹

中学校区教育の推進について説明

市長

お一人ずつコメントをいただきたいと思うのですが、最初に私から教育長に、中学校区教育の教育長が持たれている考え方と、場所によっては義務教育学校みたいなものを選んでいるところもあるわけですが、我が教育委員会はそういう考え方に立っていない。その辺をちょっと補足的に、教育長から最初コメントいただければなと思うのですが、お願ひできますか。

教育長

うちの教育委員会の方で考えております中学校区教育、そういった子ども像、それを目指して学校だけじゃなく、地域、家庭、みんなで子供を育てようという、そういう考え方が背景にあるのですが、そのためには小中の縦のつながりと、それと地域や家庭の横のつながりをという、この両面から中学校区というひとまとまりでいるのですが、

例えば小山辺りでは、絹義務教育学校という小中が一つの建物の中に9年間の学校があります。じゃ足利はなぜ、そういう9年間の義務教育学校にしないのかというあたりなのですが、実は足利市はこれまで、それぞれの学校の特色は大事にしたいという考えがあります。

昭和61年の頃ですか、実は一校一点運動というのがずっと市内の33校、教育が行われていました。一校一点運動、どの学校も、うちの学校は今年はこれに力を入れていくんだ、そういう特色あるものをやっているのですね。

例えば名草小学校を例に挙げますと、子供たちが地域を活性化させるために、総合的な学習の時間に蛍を養殖して、自分たちで育てて、これまで成長させてきた蛍に対して研究してきたことをまとめて、ホテル祭りで発表していると聞いています。それと同じように、子供たちがショウガの栽培をして、地域の祭りのときに子供たちがその結果を発表して、子供の力が地域にとっての活性化になる、やっただけでいることが地域の人にとってはすごく郷土を愛する子供が育つんだ、子供たちが大きくなってまた地域に戻って来てくれるんじや

ないかという、そういった地域にとってもありがたい、また学校の子供たちにとっても勉強になる、そういう活動をしている。

どの学校もそういう一校一点運動という特色ある活動をしている。ですので、義務教育9年間という一つの学校のまとまりをするのも、もちろんメリットがあるのですけれども、足利市としては、これまで長い間積み上げてきた一校一点運動、手元に冊子を持ってきたのですけれども、小学校長会が全33校でやった結果をこんな風にまとめて、この中には、けやき小から坂西中学校までの取組みが毎年出されています。これを大事にしたいですね。それともう一つは、子供たちが小学校で一度卒業するという、新しい環境の下で新しいスタートに向けてがんばるぞという、そういう意欲というか、それを大事にしたいなと思っているのですけれども。

その一方、できるだけ系統性を持って勉強の中身あるいは勉強の仕方、生活の指導そういったところも小中で同じ足並みでいけば、9年間を通して子供たちもより中身、ただ小学校、ただ中学校という個々の取組みではなくて、私とすると義務教育学校の良い所を取る、また足利の今までの伝統的な良い所もとるので、足利版の中学校区教育というのをやっています。

市長

では最初に菊地委員に、お子さんを育てられているご父兄の立場も含めて、小中一貫とか、中高一貫とかそういうスタイルと、小中高と分けた上で連携していくみたいなことを、ご父兄の立場から見てどうかというのも含めてコメントいただければと思うのですけれども。

菊地委員

たぶんですけれども、中学校区という意識が足利市の保護者の皆さんにどのくらいあるかなという、言葉としては、私も初めて教育委員になってから聞きたくらしい形ですので、まだまだ中学校区というのを意識して子供を育てている保護者というのが少ないんじゃないかなという風に、私としては思っていますし、子供たちは高校に行ってしまうのですが、私が小学校のPTAをやっているときも、中学校区で言うとけやき小ですから二中が中学校区になるのだと思いますが、二中に行ったことは子供たちに対する安全の話が警察からあるというので、けやき小学校のPTAと青葉小学校のPTAの役員が集まって、二中のPTAの役員もいらっしやいましたけれども、そこで一回会合を持ったということしかなかったのが、私が現役でやっていた時の状況です。ですから、中学校区教育の考え方は非常に良いと思いますし、足利としては中学校区教育で進めるという風なことであれば、より具体的にもっと会合を増やすとか、考え方はこうだというのを分かりやすく伝えるということが、まずスター

トとしては大事じゃないかなという風に思っています。

市長

大変貴重なご意見ありがとうございます。確かに保護者サイドからみてもまだ中学校区という意識とか、言葉も含めてだけ浸透というのはこれからで、そういう意味では呼びかけを含めて工夫をしていかなきゃなという面はあるのかなと思います。市橋委員お願いします。

市橋委員

義務教育学校と中学校区教育ということで話が出ていると思うのですが、中一ギャップという、小学校から中学校に行くのにギャップがあって、不登校がぐっと増えたり、中学校の教育についていけないという問題が全国的にあると思うのですけれども、そのことも考慮して一貫にして、同じ学校の中でスムーズに移行できるようにという部分があると思うのですね。それも一つの考え方なのですが、実は私、分校にいたことがあるのですね。毛野に大久保分校というのがありまして、川崎町と大久保町の子が3年生まで分校、4年生から本校に行けたのです。

子供たちの様子を見ると、分校の3年生、本校の3年生、交流はしているのですけれど、4年生で合わさるとすごく違いが出るのです。どう違うかということ、分校の3年生は最上級生だったわけですが、分校では。だから常にお兄ちゃん、お姉ちゃんという班長的な立場でやっていた。その積み重ねだと思うのですが、しっかりしているというか、違うのですね育ちが。本校に行くとそれははっきりと分かるのです。

月谷分校でもそうだったのですけれども、そういうのを見ていて、いっしょにすることがすべて子供にとって良いことではなくて、ある程度ギャップを作って乗り越えていく、それをクリアしていく力、それが生きる力じゃないのかと思うのですよね。何でもかんでも大変なものを大人が取り除いちゃってスムーズに行きますよというのは、子供にとって力がつかないと思うのですよね。そこがそういう子供たちの姿を見ていると、小学校は小学校6年生で最上級生、中学校は次の世代になる。中学校に行くときは夢と希望を持ってスイッチを入れ直して、新たな自分を発見したいという、そういう子供たちがたくさんいると思うのですね。

そういうことを考えると、やっぱり中学校区教育が良いのかなと。子供たちをスムーズに行かせることが目的じゃなくて、それを乗り越える力をつけてあげてことを考える、今の足利の教育が子供たちにとっては良いのではないかなと思います。

市長

子供にとってどういう風に手を差し伸べてあげるのが良いか、逆に手を差し伸べすぎることによって生きていく力を奪うような、乗り越える経験を奪うようなことも一方である、一方で子供には元気に育ってほしくて手を差し伸べなくてはいけないのですけれどもという。本当に難しいですよ、何が本当に子供にとって良いのかという、過保護にすることが良いことではないのでしょうし、かと言って子供は元気に育ってほしいと思えば手を差し伸べてあげなければいけないのですけれど。そこのバランスというか、非常にそれこそ教科書的に一律にどちらと言えものではないのでしょうね。そういう意味では、小学校6年生が最上級生として下級生たちを面倒見て、そういう意味での成長がある。逆に中学校に進む子で、小学校時代に持っていたもの、もしネガティブなものはそこでリセットされてみたいなきっとあるのだろうし。そういう意味では、いろんな側面があるんだなと思いますよね。

市橋委員

そうですね。だから子供には常にちょっと乗り越えられるステップを作っておいて、そういう力をつけてあげることが大事なんだなっていう気がするのですね。さっきスライドを見せていただいた中で、縦のつながりで小中学校のギャップを乗り越えられるようにということで、学習の決まりとか生活の決まりを揃えるという、何でもなしのようには見えませんがこれが結構大きくて、29年に福井市に行ったときに、福井市も中学校区教育だったのですね。やっぱり先生と話をしてみたら、そのことはとても重要だということをおっしゃってました。子供たちが学習していく上でも、生活していく上でも共通のもの、学習の決まりとか生活の決まりがあると、トラブルとか無駄な指導とか無駄な時間が省けて、子供たちにとって学習に集中できる状況を作っていくと思うのですね。じゃあどうすれば良いのかと言うと、中学校の教職員の交流というか、授業を見せ合ったり、学校にお互いに行ってみたりということが大切だと思うのですけれども、ここ数年、学校訪問をされていて思うのは、現場の先生たちは昔に比べて遥かにそのことをやっている。小中の連携、中学校区の校長先生、あるいは先生方がいっしょに研修に行ったりしているという話を随分聞いています。随分、先生方の中では、そこは高まってきているのかな。ただ足利市の場合にちょっと課題となるのは、中学校区が例えば1中学校に3小学校がすっぽり入るといって、全部中学校の中にすっぽり小学校が入る形ならすべうまくいくのですよね。

ところが足利の場合はまたがっちゃうという、小学校が二つの中学校にまたがっちゃうという学校がいくつかあるのですね。その場合に小学校が、こっちの中学校もこっちの中学校もとなると、中学校区教育をやった場合ちょっと難

しい面、ただそこも結構先生たちは、校長先生を始めとしてうまくやってくれているなという気がするので、その工夫に期待をしたいなという風に思います。

市長

ありがとうございます。次に照本委員お願いします。

照本委員

今の社会の中で、家族というのがとても変化していきまして、やはり核家族化で家族の中だけで子供を見ることも難しいですし、あとは少子高齢化や高齢者の一人暮らしが増えまして、地域の相互扶助機能が低下していると言われていいると思います。

その中で中学校区というお話が出ましたけれど、やっぱり学校って地域の中心だと思うのですよね。私なんかは町名が分からなくても、相手の人にどこの中学校の学区と聞けば大体場所が分かるっていう、やっぱり私自身の中には昔から学校単位で場所を捉えるっていうか、地域を考えるっていうのがなじみがある事なんだなということを思い返したのですけれども、新しい地域に行って学校に子供をあげるときは、地域に溶け込めるかどうかというのが非常に大きな課題で、私自身は小学校にあげるときには子供が広島にいて、私が育った場所ではなくて、そして中学校にあがる時にはこちらに戻ってきて、でもそこも今まで私が知っている人がいる場所ではない。すごくそういうことを気にしてる分、自分もですけど、子供も、自分の家族だけじゃなくて地域みんなに育てられていたんだなと、学校に進学するたびに印象を強く持つようになりました。

既につながっている中に入るとということは、すごく私が不安に感じたように難しいことではあるのですけれど、逆に既につながっているということは、小学校から中学校にあがったり、幼稚園から小学校にあがるときに、不安をすごく少なくすることだとやっぱり思うのですよね。そういう意味では、先ほど中学校一年生になるときのギャップの話がありましたけれども、家庭だけでなく、学校だけでなく、地域だけでなく、全体で子供たちを見ていこうというのが中学校区教育だと私は理解したので、そういう形で教育を進めて行くということは、子供たちにとって心の安定にもつながりますし、心が安定すると学力の向上ということにもつながるので、これはとても良いことではないかなと思います。

中学校区、小学校と中学校の連携というのが資料にもありましたけれども、先ほど①の資料で、学校教育法ですかね、第22条を見ると幼稚園もそこに記載があって「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し」とありますので、幼稚園と小学校の連携も含めて全体で考えるということ、

また子供にとっても、また地域にとっても、子供をそういう目で育てて行けば、大きくなった時に、子供がまた地域全体で子供を見て行こうと考えることにつながりますので、幼稚園、小学校、中学校で見ていくというのもすごく良いことではないかなと思いました。

市長

ありがとうございました。では笠原委員お願いします。

笠原委員

どの時代にも、特にその世代の子供たち、小中学生に対しての課題というのは、時代によって若干変わったりしながらあるわけで、どの時代にもいろんな課題がある。その課題というのは、さっきの例えば、具体的に中一ギャップというのがあったり、スマホの問題もありますけれども、要はその課題を解決するのは、箱とかシステムじゃなくて、それをより助長するということはあると思うのですけれども、やっぱり学校だけじゃなくて、地域とか家庭が加わって解決していくものだという根本は変わらないんだと思うのですね。小中一貫とか、例えばそれは地域性とか、あるいは伝統とか風習だとか、そういう中でそちらが良いということもあるでしょうし、足利の選択の中で中学校区教育という選択をしている訳ですけれども、それが足利にあるというのはそれは良いと。今の時代がそうであって、その時代、時代によって箱やシステムの考え方が変わってくるんだろうかなと思うわけですね。

私はやっぱりそういうのはいずれにしる、イメージ的には、私達が子供の頃って、学校というのは親が学校に行かせて、子供が勉強して家に帰ってくると。家庭から見れば学校というのは、子供が授業を受ける、あるいは積み重ねて人格形成をしていく、そういう受け皿になってくれているという場所であったわけですけれども、学校というのはややもすると、ブラックボックスとは言い難いですが、少なくとも送り出して迎え入れると、学校というのは受け入れる側の場所に位置していたんじゃないかなというイメージがあるのですけれども、今は可視化、見える化する中で、地域だとか家庭だとか、どうやって連携するか、つながっていくかというのが一番学校に求められることなんじゃないかなと思いますし、そういう意味では、中学校区教育の中でもいろんなそういう可視化、見える化ができていて、まして地域や家庭がよりその子供の課題に対していろんなアプローチをして課題を解決していくという構造は十分できているんじゃないかなと思いますし、少し脱線しちゃいますが、東日本大震災の後、それぞれ災害時の事故マニュアルを作ったと思うのですね。各学校ごとに作ってあって、私の記憶では、その小中連携とか、例えば合同引き渡しがありましたね。小学校と中学校に兄弟がいて、親御さんに引き渡すとき

にそれぞれ別個に引き渡すのか、毛野小と毛野中とか、桜小と三中とか兄弟が非常に近くにおいて、その時にそれぞれが引き渡しに対して別々の事故マニュアルになっていて統一感がなかったかもしれないのですけれども、そういうのも含めて中学校区の中で、小学校と中学校がいろんな決め事を統一化することも含めてやる中で、地域とか家庭の見える化が余計進んで、子供たちに対するいろんな総合的な課題が十分解決していくというのがあるかなと思います。

市長

ありがとうございました。振り返ってみると、我々が子供の頃に比べたら、学校というのは可視化、見える化という言葉が出ましたけれども、非常にオープンになってきているなどという実感はありますよね。子供だったから気づかなかったかもしれないですけど、地域の連携みたいなことは、意識としてはあまりなかったと思いますけれど、そういう意味では中学校区教育の一つの柱というのが地域の連携ということだとすると、中学校区教育というのを枠組みとして地域の連携ということが展開されているとすれば、これからますます強めていかなければならないかなという感じを私も議論を聞かせてもらって思いました。

教育長

いろいろ意見をいただいて大変ありがたかったなど。その中で菊地委員さんからPR不足じゃないかと。それを言われて、ああそうだなと思ったんですよ。もっともっと教育委員会だけじゃなく、学校は学校で中学校区はこんな取り組みをやっているんだよとPTA 総会とか、いろんな会議、地域の自治会さんが集まるところとか、教育委員会は教育委員会でもまた違った立場から、PTA 連合会とかそういったところへ、もっともっと周知すべきだなと感じました。

それと併せて、縦のつながりで小中の連携というところで一番課題になっているなど思っているのは、私は小学校の先生が中学校をどのくらい知っているか、この子供たちが中学校に行ってもどうか、中学校の先生は小学校でどういう授業、どういう勉強をしてあがってきたのかという、先ほど市橋委員さんから一緒に研修会に行くとか視察に行くとかそういうお話、これは大体夏休みなんですね。普段は小中の間で行ったり来たりできるのは校長先生あたりくらいで、といったときに私が課題だなと思っているのは、免許状なんです。

小学校の先生が中学校で教員をやってもらいたい。中学校の先生も小学校でやってもらいたい。ただ免許状は両方持っていれば良いですけど。その免許の取得の仕方、大学の単位の取り方とか、そういったところをもうちょっと柔軟にさせていただいて、必ず教員になったら両方を経験することとか、そういった仕組みを国の方でも考えてくれると良いなど。これが課題となっております。

市長

次の GIGA スクールをお願いします。

○ 日程第 2 議題（2）

教育研究所次長

GIGA スクール構想を核とした教育の ICT 化について説明

市長

では、お一人お一人から感想でも良いし、問題意識でも構わないのですけれどもコメントしていただきたいと思います。まず、一番 ICT に詳しそうな笠原委員から。

笠原委員

まず一点ですね、初歩的な部分から私がかかっている部分がありまして、逆にお伺いしたいのですけれども、ハード自体は学年に設置しますよね。持ち上がる訳ではないですよね。

教育研究所次長

今のところ、そこも検討していて、今の段階だと持ち上がらない、例えば机や椅子のように置いておこうと。

笠原委員

そうですね。持ち上がらないで一年でまた変わっていくということよりも、本来持ち上がっていった方が良いのかなと思うのですけれども。ただ中 3 になったときに、それを高 1 に持っていけないわけですから、それはどうなのかってありますけれど。持ち上がらないことのデメリット、持ち上がることのメリットそれがちょっと分からないのが一点ありました。

話がまた脱線するのですけれども、私も長くやっております、何人かの教育長さんをご一緒させてもらってますけれど、特に若井教育長は、それぞれ教育長がぽろっといろいろな言葉をお出しになるのですけれども、個への着眼というのを良くなされるのですね。本当にそれが一番大事なことですし、むしろ今までの教育長さんも当然そういう意味で、そのことを大事にされていると思いますけど、GIGA スクール構想はまさに実践できるというか、ルールに乗るストーリーじゃないかと思います。これは本当に期待したいと思いますけれども、若井教育長の夢がこういった形でのっていく、そうしたら良いのではない

かなど。楽しみにしております、よろしく申し上げます。

市長

ありがとうございました。では照本委員。

照本委員

去年の12月に文科省の研修でGIGAスクールの研修を受けてきて、今日も資料にありますけど、日本の子供たちのデジタル機器の利用率は決して低くないのに、学習に使っているという割合が圧倒的に低いという、その時にもその説明を受けて、本来的にさっきお話があった一番生産性の高い機器で、一番生産性の低いゲームとかをしているとありましたけれど、本当はスマホを持っていたら隙間の時間とかで、ユーチューブでも学習系のチャンネルなんかもありますし、オンラインで勉強するようなものもあるので、学習に使う習慣があっても良いんじゃないかなと思うのですが、やっぱりそれは今まで大人も子供が見えるところでは、もちろん会社であったりとか自分の自室で仕事する時には、iPad使ったりパソコン使ったり仕事などに使っていると思うのですが、子供が見えるところではおそらく大人も今までゲームしたりとか、子供がやっぱり真似してすることを多くしてきたのだと思うのですね。

今回、新型コロナウイルスの件があって、会社にも行かずに家で仕事をする。ZoomとかLINEとか、そういったツールを使って人と対話して会議ができる。それを子供が結構そばで見ている、というのをテレビでやっていると思うのですが、ああいうのを子供が見るとスマホであったりとかiPadであったりとか、そういった機器にゲーム以外の可能性というか、いろんなことに使えるんだということを気付くきっかけになったんじゃないかなと思うのですね。

そうすると今後はそういう親の姿を見て、ゲームだけじゃなくて、学校ももちろんICT環境を整えてやっていくとは思うのですが、家でももっと効率良く、生産性高く勉強するとかですね、そういうことに使うことにも慣れていくと思うので、たまたま、あまり良くない新型コロナウイルス感染症の拡大ということが契機ではありましたが、一気にその機会を得ることができるのか、そのことはすごく良いことじゃないかなという風に考えています。

市長

今の問題意識で言うと、確かにスマホ禁止みたいにしていないですか。その整合性はどういう風につけていくのですか。

教育研究所次長

そうですね。文科省の方もある一定のという回答の中で、持込可ということになってますけれども、そのところは情報モラルというのは使うようになれ

ば身に付いていくものであると考えていますし、そちらも大切なんですけれども、照本委員もおっしゃったようにリテラシー、今までは禁止だよという情報モラルの部分でしたけれども、これからの子供たちには、それを上手に使うという情報リテラシーというところも、これから進めて行かないといけないのかなと思います。また実際に1人1台になることによって、今までは自分ごととして捉えられなかったことが、低学年から高学年まで揃っていきますので、本当でしたら今年、教員研修でリテラシーのところを入れたのですが、コロナで中止になって資料だけ頂いているのですが、こちらの面も同時に進めて行かなければならないなという風に考えています。

市長

なるほど。菊地委員お願いします。

菊地委員

この GIGA スクール構想とずれるかもしれないのですが、コロナで学校が休業になって、私の子供は高校に通っているのですが、どういうことが起きたかをちょっと紹介したいと思うのですが、長男の方は群馬の公立高校に通っていて、長女の方は県内の私立の高校に通っています。

急に休校になったものですから、どういう風な手段で学校が教育をするのかなと思って見ていたのですが、長男の方は学校で **Classi** という学習ソフトを入れていて、今みたいな全国で一斉に休校になるような事態を想定していない中で作ったソフトらしいのですが、そのソフトしか学校が使えて生徒たちとつながれるソフトがなかったものですから、学校の方もそれを使ったのですが、これが全く使えないソフトで、学校から課題の連絡とか、例えば30分以内に問題を出すからこれを解いてくれとかいろいろ来るのですが、トラフィックが多くなりすぎて、そのシステム自体が全然使えなくて、息子は夜中の2時から朝の5時までに、トラフィックが落ちて課題がダウンロードできないからと言って、目覚まし時計をかけてその時間に起きてどうにかシステムを使おうと一生懸命やったり、非常に見ていてかわいそうだと思いますし、学校の先生に全然 **Classi** が使えないと文句を言ったらしいのですよ。そうしたら先生も **Classi** には困ってますと回答があるくらい、非常に使えないシステムだったのですよ。

それが全国かなと思ったら、長女の方は別のシステムを学校が使ってまして、これは **Google Classroom** というシステムを使っていたんですよ。これは全くダウンしなくて、課題とかも普通に来ますし、学習の内容も見ていてもすごい量を出されて、それに必死でついていくようなことをしながら、休校中でもすぐ学習が長女の方は進んだんですよ。

なんでこんな差が出たのかなと、当然ソフトの選び方もあるのですが、やっぱり現場にすごく熱心な先生がいらっしやったんですね、リモート教育に対しての。ですから、そういうところの構想があると、非常に差が出るなという風に思いますし、GIGA スクール構想で全国で動いても相当地域によって差が出るのだと思うのです。ですから、そこは待っていないで足利の GIGA スクール構想の中で、インフラは整った中で突き抜けるためにはどうするかというのは、現場に熱心な先生がいらっしやるかどうかというのは非常に鍵じゃないかなという風に思っています、こちらの ICT 支援員がいらっしやるのは当然良いのですが、そちらの人に任せない雰囲気、本当に競争になると思うので、突き抜けるような構想力というのが求められるのではないかなと感じています。

市長

そこは僕も聞いていて、先生の負担が大きくなるのではないかと、詳しい先生が、たまたまいるかいないかみたいところで差が出来てくるのではないかと、というところを懸念としては持っているんですよ。それなので、ぜひそこは教育委員会でも、そういう好きな先生、おたく的な先生はいますか。

学校教育課長

若い方は結構みんな詳しいので。

市長

市橋委員。

市橋委員

今スキルの話が出たのですが、ICT の世界はものすごく進歩していて、ちょっと前に聞いたらクラウドで対応すればサーバはいらなくて、ハードウェアも購入しなくて良い、ソフトウェアもインストールしなくて良い、端末だけあれば常にクラウドとつながってデータも全部そこに入っているという世界があるんだそうですね。それをうまく使いこなせば、今まで不可能だったことが可能になっていくんじゃないかと。さっき言ったトラブルが無くなってくるんじゃないかな、そのクラウドを使うと。

Google にも入っているらしいのですが、そういうことを良く知ること、使い手として、最初のところに「我が国の教育実践と最先端の ICT のベストミックスになるように」、ベストミックスになるかどうかは、私たちがいかに使うか。いかに使うかの前に ICT を良く知ることが大事だし、ICT のメリットとデメリットを良く把握していくことが必要かなという風に思います。

ちょっと前の教育委員会で、足利の中学生で家庭に ICT 環境が整っていない子が何パーセントかいるということを教えていただいて、そのことについてすごく気がかりだったのですね。もしまた第何波が来て、オンライン学習になった時に、その子たちはどうしたら良いのかという、学校に来なくちゃできないのかと思ったら、しばらくして対策が取れるという話を聞いたので良かったなと思ったのですが。世の中の ICT が進歩しているので、問題は活用できるようにすることが最大のキーポイントかな。そのためには、教師が良く勉強して ICT に対する指導力をつける、それと子供たちの情報活用能力を高める努力、ICT から人に関わるそこがうまく行かないとベストミックスにならないのかなという気がするのですね。最初 GIGA スクールは 5 年でやるわけだったのが、4 年になって、コロナでついに 1 年になった。これをどう見るかですが、私はベストチャンスだという風に捉えて、意欲的にやった方が良いと思うのですね。折角のこれだけのものが子供たちの手に入るということですから、私たちとしてはいかに ICT の勉強をして、使いこなすようにしていくかということが大事なのかなと思います。

市長

教育長、最後に問題意識を含めて。

教育長

みなさんがおっしゃった通りなんですけれども、子供は一人ひとりみんな違うということで、学習の進度も違えば、勉強のやり方も具体物を使った方が理解する子、あるいは絵や写真、あるいは体験を通して理解ができる子、様々。昔から 1 クラス 35 人いれば 35 人の指導案をつくりなさいと、そんなことを言われたこともあったのですけれど、そんなことは到底無理で、そこで一人の先生が 35 人の子供をどうする、自分の時には大体これ位の子供たちにはこのプリントを、この子にはこのプリントを、そんなやり方をしながら机の間を周って一人ひとりに指導をしていくという形だったのですけれども。

そこから一步出てきたのが習熟度別学習、あるいは少人数指導といってチームティーチングで組むとか、人を増やしていく。でも人を増やすにも限界があって、そこで出てきたのが今のツールとしてのコンピューターということで、これを使ってもまた限界はあると思うのですけれども、有効に使いたいものだ。足利の先生方には、早く実践化をしてもらいたいと。機械が揃う前からやってもらいたいと、そんな思いです。

市長

従来の教材研究みたいなことにプラスアルファでこの ICT をどういう風に使

うかみたいなのが先生には求められてくるし、そういう時代になったんだなという気が非常にしますので、そういう意味ではうまく使って子供の学力を含めて効果をどんどん発揮するところと、手間取ってばたばたするところと、少し差が出てくるのかなという感じがしますよね。

学校の先生たちの、あまり精神論に頼るのは良くないですけども、頑張ってもらわなければならないかなと思いますので、よろしくできればと思います。ちょうど時間ですので、今日の議題以外に何かなければ事務局に返したいと思います。よろしいですか。

では事務局に返したいと思います。

事務局

以上を持って、令和2年度の第1回総合教育会議を終了する。

○閉会 午後5時15分